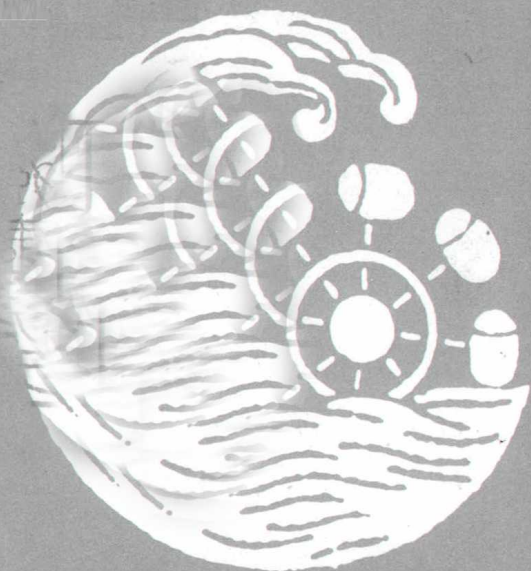




君の謎

中村雅楽推理手帖

戸板康二

講談社

淀君の謎——中村雅楽推理手帖——

一九八三年九月二〇日 第一刷発行

一九八三年二月一日 第二刷発行

著者——戸板康二

© Yasuji Toita 1983. Printed in Japan



発行者——加藤勝久

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽一三—三 郵便番号二三 電話東京三—九四—二二（大代表） 振替東京八—五九〇

印刷所——信毎書籍印刷株式会社 製本所——株式会社黒岩大光堂

定価——二二〇〇円

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

淀君の謎

7

かんざしの紋

75

むかしの写真

105

大使夫人の指輪

127

芸養子

157

四番目の箱

187

窓際の支配人

215

木戸御免

239

後記

262

初出一覧

265

淀君の謎

——中村雅榮推理手帖——

装幀 朝倉 攝

淀君の謎

現代の読者は、たとえば井上靖氏の「淀どの日記」を読んで、淀君という女性に関するイメージを持つことがあるだろう。

しかし、戦争前には、淀君といえは、歌舞伎の舞台に登場する淀君以外、ほとんどそれを知る手がかりはなかった。

つまり、坪内逍遙が書いた「きりひとは桐一葉」「ほととぎす沓手鳥孤城落月」に出て来る淀君が、彼女の姿を具象化していたにすぎなかった。

この二編の脚本は、逍遙が自分の新史劇の理想をみずから示そうとして執筆したものだ。はじめ逍遙は、淀君を五代目尾上菊五郎が演じる場合を考えていたらしいのだが、その菊五郎の生きているあいだは、文学者の作品を歌舞伎俳優が手がけるといった開放的な空気が、歌舞伎の世界にはまだなかったのだ。

明治三十七年になって、はじめて歌舞伎の興行師が演目にえらび、当時の芝翫しのかんのちの五代目中

村歌右衛門が「桐一葉」を上演、その淀君は、この女形の生涯を通じての最高の当り役になったのである。

戦争前の淀君は、この歌右衛門によって演じられた淀君のイメージに代表されると考えてまちがない。

通説だが、シェークスピアを全訳した逍遙には、当然その作品の影響がすくなくはないはずで、淀君の役の設定は、「マクベス」の悪妻の印象が、影を投じているといわれる。

つまり、「桐一葉」と「孤城の落月」の淀君には、悪女の要素が濃いのである。

歌右衛門と同じ舞台に立ったことのある老優中村雅楽は、淀君の芸のすばらしさを充分知っていて、なおかつその淀君が悪女でありすぎるのに不満を持っていたらしい。

雅楽は推理の才能に富んだ人で、劇界の周辺におこったいくつかの事件の謎をといて、東都新聞の演芸記者竹野に覚え書を書かせた俳優だが、淀君という女性には、むかしから特別な関心を持っていたようだ。

竹野が雅楽の淀君論を聞ききっかけが、たまたま、この五月の歌舞伎座に「桐一葉」が六代目歌右衛門によって演じられることがきまったために、できた。

「桐一葉」でかつて石川伊豆守や大野修理之亮^{しゅりの}治長^{はるなが}を演じたことのある雅楽が、大正時代の新歌舞伎が今よりもっと古典的だったという話をしたので、竹野がこの際とばかりに乗り出して話をせがんだところ、芸談のかわりに雅楽がはじめたのが、淀君論だったわけである。

竹野はさりげなく聞いていたのだが、雅楽は淀君について、まるで自分のよく知っている隣人を語るような話し方をする。

歴史家は文献や史料によって淀君という女性の生涯をたどり、その伝記を書きあげてゆくわけだが、竹野の読んだどの淀君の本よりも、雅楽の知識はくわしかった。

しかも雅楽は、ある時竹野に話してくれた俳優の変死事件や楽屋で国宝級の仏像が紛失した事件について分析する時のような情熱を、言葉に示した。

竹野は、そういう事件の話を聞いた時と同じ胸のときめきを感じながら、メモをとったのである。

(一)

「淀君については、歴史的にもわからないことが、ずいぶんあるんですよ」と、雅楽は千駄ヶ谷の家の座敷で話しはじめた。

「淀君は徳川家康に反発して死んだ女です。はじめから、徳川側からは好かれていません。幕府の御用学者が書いた淀君が、悪女らしく作りあげられたのは、あたりまえのことかも知れませんよ」

「淀君はあの夏の陣で、どうしても妥協できなかったのですかね。家康のほうは、淀君が条件を

のめば、秀頼とともに、助命する気でいたのでしょう」と、竹野がいった。竹野は、徳川時代の多くの民衆が、難波軍記を通じて大坂落城の悲劇を知って感じたのと同じような感想を持っていたから、淀君を助けたかったと思っており、それがこういう愚痴になったのである。

「淀君がなぜ家康に無条件降伏をしなかったか、というのも、あの人の謎のひとつですよ」と雅楽は、竹野の顔をじっと見つめながらいった。「権力者は、いろいろ反省するものです。フランスの革命でも、王様やおきさを処刑したのが、こいつはまずかったと、あとで悔いたという話があるそうじゃありませんか。家康は、あの時強引に城攻めをして、豊臣家を亡ぼしてしまったんですが、あと味がよかったはずはない。息子の秀忠の代になると、一層そういう思いは強かったでしょう。何しろ秀忠の奥方は淀君の妹なのですからね。おまけに、秀頼に嫁がせた千姫は、まんまと救い出している。徳川の一族には、淀君や秀頼の霊が夢に出て来るような、寝ざめの悪さがあったのにちがいないと思います」

「おっしゃるように、淀君が開城をあくまでこぼんだのは謎ですね」

「淀君の性格や癖を考えてみる必要がありますね。持って生まれたその人間の個性が歴史を大きく左右するんです。坪内先生は、淀君の驕慢な性格を強調なさっているが、理由は、それだけではありません」

「とすると」

「淀君の心持をうまく説明した浄るりがあります。寛政六年に書かれた『日本賢女鑑』（にっぽんけんじょかがみ）というの

で、淀君を賢女だといっているんですがね」

「おもしろいですね」

「この浄るりも、私の考え方にひとつの目安をつけてくれましたよ」

「淀君という名前を使っているんですか」

「とんでもない。徳川時代のことですから、変名です。大石内蔵之助を大星由良之助にしたのと同じように、淀の方を宇治の方といっているんです。淀でなくて宇治とは、しゃれているでしょう。大坂兩陣の物語は、べつに竹野さんも御存じの『鎌倉三代記』『近江源氏先陣館』という浄るりになっていますが、この二つの中に出て来る淀君も、変名は宇治の方ですよ」

「淀君が家康の前に大坂城をあげ渡さなかった理由を、高松屋（雅楽の屋号）さんはどう解釈なさっているんですか」

「私の考えは、あとで、ほかのことと一しょに、ゆっくりお話しますよ」と雅楽はいった。「まずここで、淀君という女が生まれてから死ぬまでたった一生の中で、謎めいた点を拾ってゆきましよう。どういふところが、ふしぎなのか、それをひとつひとつ数えてみましょう」

竹野がいつも耳にして来た、雅楽独特の話術である。舞台に立って芸をさせても一流だが、この老優は、話し方が無類だ。自分の知っていることを、雅楽は、たいへんうまい順序で話す。聞いているものが、ひきこまれますにはいられないような、魅力的な話し方をするのであった。

雅楽は、先代歌右衛門の淀君の写真を、竹野の前にとり出した。

「これは、成駒屋の二度目の淀君です。まだ若い時ですから、きれいですよ。あの人は死ぬまで絶妙の気品があったし、美貌を失わなかった。しかし、四十代五十代の美しさは、ちょっとあとにも先にもない女形だったといえますよ」

なるほど、もともと下ぶくれの歌右衛門の顔は、まだ頬がゆたかで、目もとに何ともいえない愛敬がある。淀君をまったく自分の持ち役にした安定感が、豪華なうちかけを着た下げ髪その顔にあふれている。

「ほんとにきれいですね。淀君の美しさが、そのまま出ています」

「淀君は、美人だったのかどうかというのが、まず問題です」と雅楽が思いがけないことをい出した。

竹野は、おどろいて、すわり直した。

「淀君が、美人でないという見方ができるのですか」

「何でも一応疑ってみるというのが、大切です」と、雅楽は、名探偵シャーロック・ホームズのような警句をいって、クスッと笑った。

「だって、淀君は美人として名高いお市の方の娘でしょう」

「そうです。お市の方は、織田信長同腹の妹です。絵姿が残っていますが、たしかに美しかったにちがいありません。信長の顔も絵になっていますが、二人とも、鼻すじの通った、おも長の美